

第67回 全国高等学校PTA連合会大会 静岡大会

基調講演・ 記念講演



「有徳の人」づくり

～未来のために行動する「一人」を育てよう～



講演者

静岡大学名誉教授

おわだ てつお
小和田 哲男 氏

「戦国武将に学ぶ子育てと人づくり」

ただいま御紹介いただきました小和田です。

ようこそ静岡においでくださいました。

今の静岡県というのは、昔は駿河の国、遠江の国、そして伊豆の国という3つの国から成っていきまして、ここ袋井は遠江の、昔流の言い方で言いますと遠州という言い方をします。今年の大河ドラマの「おんな城主直虎」の舞台は井伊谷というところで、ここから少し西へ行った浜松のさらに北へ行ったところ。浜名湖の少し北側になります。

私、御紹介いただきましたように、幾つかこれまで大河ドラマの時代考証をやってきましたけれども、今年のドラマは、どちらかという下から目線といいますかね。今までどうしても信長、秀吉、家康という天下を取ったような武将たちの生きざまです。上から目線になっちゃうんですが、今年の場合は、江戸時代というとせいぜい2万石ぐらいの小さな領主ですので、村人たちのおつき合いという関わりが非常に多い。今までの大河ドラマではほとんど出てくるのがなかった、例えば隠田とか徳政令だとか、あるいは検地といった言葉が出てまいります。そのあたりの戦国の村を研究している私としては、今年是非常にやりがいがある1年だなと思っています。

テレビの字幕にも時代考証ということで出ますので、せっかくの機会ですので少し、あまり時間がありません

けれども、時代考証の内幕を御披露したいと思います。

原作がある場合、原作がない場合、両方ありますけれども、今年の場合は原作がないので、脚本家の方が1話1話シナリオ、脚本をつくってまいります。それに目を通して間違いを直していくのが主な仕事になります。

事実関係の違いを指摘するのは一つ大きな仕事です。例えば今年の場合、まだあまり多くは語れませんけれども、これからもう少ししたら出てまいります長篠設楽原の戦い、天正3年(1575年)のこの戦いで、最初に脚本家の森下佳子さんが書かれたシナリオでは、明智光秀が織田信長に、今度の戦いはこういうふうに進ましようかと作戦を進言するシーンがあったんですが、実際は明智光秀はこの長篠には来ていませんのでということで、別の武将に差しかえてもらったりすることをやっています。

それと多いのが、やはりセリフですね。これはちょっと笑い話みたいにして聞いていただきたいのですが、今年のドラマの最初のころ、「何だおまえ、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして」と出てきました。いやちょっと待ってください、このころまだ遠江には鉄砲は一丁もありませんのでということで、豆鉄砲ということはないですよということで直しを入れる。

そのあたりはどちらかという間違い探しですから、

やってて気は楽ですけども、実際、演出家の方たちとのやりとりは結構シビアですね。

今でも記憶にあるのは、2011年、「江〜姫たちの戦国〜」のときに、織田信長が滋賀県の、現在長浜市ですけれども小谷城を攻めるというシーンがありました。信長は、御承知の方多いと思いますけれども、平気でお城だ町だ村だ火をつけていった。神社仏閣もそうですけれども、平気でどンドン火をかけた武将です。

ところが、この小谷城に関しては、3年間攻めるとは、3年間攻めるとは火をかけた記述はないんです、史料に。しかも、あそこは今国の史跡になっていまして、継続的に発掘調査をやっていますので、今掘っていますという情報が入ると、私もすっ飛んで見にいって掘っている人から生の情報をもらっているんですけれども、焼けた痕跡は上のほうからは出てきませんという証言をもらっています。だから、私は「江〜姫たちの戦国〜」のときに、スタッフに「小谷城は焼けていませんから、焼かないでくださいよ」と念押しをして、焼かないことになっていた。

ところが、収録の直前でした。チーフプロデューサーではなくて、チーフディレクターといましてNHKでも結構偉い人ですが、電話が来まして、これから小谷城落城のシーンを撮る。お市の方が茶々、初、江の三姉妹を連れてお城を出るシーンを撮るんだけれども、彼女がちらっとお城を振り返るときにお城のどこからも煙が上がっていないと、見ている人が小谷城落城だと思ってくれない。このときの言い方を今でも覚えています、「ちょっとだけでいいですから、火つけさせてください」と言うんですね。「だめですよ、焼けてないんだから」と私は断ったんですが、そのチーフディレクターは「お願いしますお願いします。演出上必要なのでお願いします」。こっちは根負けして「しょうがない、ちょっとだけです」ということでオーケーを出したんですが、でき上がったシーンは大々的に燃えていました。これにはちょっと参りました。そんな失敗もあったりするんです。

今、大河ドラマ館というのが旧細江町、今の浜松市北区で展開されていますし、今月の14日からは、静岡市にあります静岡県立美術館の「戦国!井伊直虎から直政へ」という特別展で、今までドラマにもちょっとず

つ出てきたいろんなものが展示されています。それから、美術館には有名な徳政令の文書だとか、あるいは井伊家が代々伝えてきた井伊の赤備えの甲冑なんかも展示されていますので、もしお時間がありましたら、そういったところにも足を伸ばしていただけるといいなと思います。せっかく全国から静岡へおいでいただいたので、静岡の歴史に少し触れて帰っていただければ幸いです。

さて、今日は御案内のとおり「戦国武将に学ぶ子育てと人づくり」ということで話を進めてまいりたいと思います。

やはり子育てとなりますと教育。

昔は、学校というのがないんですね。学校がないと言っちゃうと、足利学校というのがあるじゃないと言われるかもしれませんが。確かに足利学校という学校はありましたけれども、これは今の学校とは違っていて、要するに僧侶養成機関です。そこでは昔の天文学、星座を研究したりとか、あるいは薬学とか兵学といったものを教示して、これらを身につけた人たちが全国に散らばっていくという形で、そこを経たというかそこを卒業した人の中から戦国大名の軍師になっていった人もいっぱいいるということですので、私は、足利学校は今の学校とは違って、一種軍師養成機関あるいは僧侶養成機関という位置づけをしています。

じゃあ学校はなかったのかというと、学校にかわるものはあったんです。これがお寺です。お寺というと、江戸時代の寺子屋をすぐ連想されると思います。戦国時代にはまだ寺子屋という概念はないんですが、お寺で武将の子弟、武士の子どもたちは修行したりしていた。

有名なものでは、8月26日ですから明後日か、映画「関ヶ原」が公開されますけれども、あの石田三成は若いころというか子どものころ、佐吉といっていた少年時代、観音寺というお寺で修行をしていた。そこに秀吉が立ち寄って、例の三献の茶のエピソードがございますが、俺の家来になれということで採用されていたいきさつがあります。いわゆる土豪クラス、地侍ともいいますが、ある程度の地位の武将の子どもたちはお寺で勉強をする機会があった。

一般庶民の子どもたちは全くなかったのかというそ

うでもないですね。意外なところから、ちょっとおもしろい史料がありました。

これは現在の福井県ですけれども、村人たち、普通の農民が、自分たちは字が書けない、読み書きできない。だけど、読み書きができないと何か損しているなどということで、子どもたちにはちゃんと読み書きができるようにさせたいということで、何と代表を決めて、街道からちょっと離れていたのが遠かったのでみんなが行くわけじゃなかったらしいですけれども、代表を街道沿いに立たせて、道行くお坊さんたちに声をかける。

「お急ぎですか」。「そうでもない」と言うと、「ちょっと何か月かうちの村へ立ち寄って、子どもたちに読み書きを教えてもらえませんか」「いいよ」ということで、村のお堂なんかをかりて、「食事の世話、それから寝るところを準備しますので、短い期間でもいいですから子どもたちに読み書きを教えてください」というような史料も出てきたりしていますので、武士階級だけではないんですね。それだけ、やっぱり親たちの教育熱心さというのが我が国の一つの伝統だったのかなという感じがしております。

武将たちの場合は、やはり将来人の上に立つためにも、単なる読み書きではなく、人間としていかに生きるべきかという資質、帝王学といったものをお寺で学ぶこととなります。

一番多いのが、やはり論語だとか大学、中庸といった、いわゆる四書五経といった中国伝来の書籍から学ぶ。あるいは昔の和歌ですね、万葉集、古今集を勉強するといったのがあります。というのは、やはり武将たちの教養として、歌ひとつ詠めないじゃだめだということがありますし、もちろんいろんな謡だとか、鼓、小鼓だとか太鼓とかいった音曲に関するところも学んだりしています。

そういう中で、いろんなところで実際例が、具体例があるのは、特に禅宗のお坊さんたちが武将の子弟の教育の役割を果たしていたということが非常に多いんです。例えばこの静岡県でいうと、駿河、遠江、そして三河まで支配下に置いていた今川義元。

この今川義元、今年は大河ドラマで落語家の春風亭昇太郎が演じていました。昇太郎とは何度もお会

いしているんですけれども、この間は、私は嘶家なのにセリフが少なかったと言ってちょっとぼやいていました。今川義元は雪齋という、正しくは太原崇孚というんですけれども、雪齋というお坊さんに子どものころから教育を受けている。

武将の子弟がなぜお寺に入れられたかという、これには2つ理由があります。

1つは、兄弟が多いと後継ぎ争いが起きる危険がある。

これは室町將軍家でもそうです。足利の流れを引いた今川家は足利將軍家と同じような形をとっています。兄弟が5~6人いると、1人ないし2人を残してあとはお寺に入れておく。1人残っていた跡取り候補が何かの形で、例えば病気で死んじったりあるいは戦いで死んじったりしたら、お寺に入っていた弟たちの中からピックアップしてくる。

実際、今川義元もそうです。現在の静岡県富士市というところに、今はお寺がなくて善得寺公園という公園になっていますが、その善得寺というお寺で修行をしていた。そのときの先生が雪齋。その後義元は、お兄さんが亡くなった後家督争いに勝って今川家を継いだときに、先生だった雪齋を自分の政治外交軍事顧問、私どもは面倒くさいから軍師と言っちゃっていますけれども、そういう形で迎えて、本当にいろんな相談をした。今川家があれだけ大きくなったのは、やっぱり雪齋という有能な軍師がいたからだと思います。

その雪齋に習ったのが子どものころの義元だし、それから今度は今川義元のところに人質に来ていた松平竹千代。

静岡市に行きますと、大岩というところに臨濟寺というお寺がございます。ふだんは入れなくて、5月19日の今川義元の命日と、10月の何日か日には忘れまされたけれども、年に2回しか一般公開はしていませんが、そこに竹千代手習いの間という部屋がございます。竹千代がその部屋に通って雪齋から教えを受けたという部屋です。ただ、これは本物じゃないんです、実は。永禄11年、今年の大河ドラマでももうやったところですが、武田信玄が駿府に攻め込んできたときにその寺は焼けています。その後にもう一回誰かが、ここで竹

千代が学んだよということを記念に残すために部屋を復元した。これが現在残っているわけですけれども、私に言わせると、竹千代、後の家康は、雪齋からいろいろ学んだからあれだけの武将になれたんだと考えています。

現在京都大学附属図書館で所蔵されています「武辺咄聞書」という本の中にそのいきさつが、若干ですけれども出てきています。家康にとって、そこで勉強したというのは、後の天下人になっていく上で非常に大きな要因があったと思います。

今年の大河ドラマで出てきています井伊直虎、次郎法師の先生が、やはり今年ドラマに出ています南溪瑞聞というお坊さん。実は直虎にとってはおじさんに当たる人で、南溪瑞聞もやっぱり井伊家の人間。

井伊家には5人兄弟がいました。そのうちの1人が出家してお坊さんになって、今年ドラマで小林薫さんが演じております。しょっちゅう猫を抱いて出てきているのは、私はよくわかりません。あれが、もしかしたらひこにゃんになるのかななんて思ったりしているんですけれども。小林薫さんが熱演しております南溪瑞聞もやっぱり井伊家の1人で、龍潭寺というお寺の住職になる。そこでやはり直虎も修行をしたりしていますので、一門の人間を育てる、あるいは竹千代のように人質になってきた人間も育てるという側面があったということになります。

あと2人だけ。

1人は、上杉謙信を育てた天室光育。今の新潟県上越市ですけれども、春日山城の麓に林泉寺というお寺がございます。上杉謙信も、長尾の家に生まれたわけですけれども、次男あるいは三男、もしかしたら三男以下だったかもしれません。お兄さんの長尾晴景という人が家督を継いだのでお寺に入れられていました。そこでこの天室光育の教えを受けて、単に人間としての生き方、上に立つ者の務めだけではなくて、結構兵法も習っていた。これがみそなんですね。

お兄さんの晴景が、自分の弟がちょっとできがいいぞということで、今は長岡市になりましたけれども旧栃尾の栃尾城の城主にしました。そうしたらいい手柄を立てちゃうんですね。長尾家の家中から、どうも晴景

様よりも弟の景虎様のほうがよさそうだということで、だんだんだんだんそっちを応援する動きになってきました。結局、晴景は弟に家督を譲るという形で引退していきました。長尾景虎がその後上杉輝虎になって上杉謙信になるというわけですから、やっぱり子ども時代という少年時代、林泉寺というお寺で天室光育というお坊さんにいろいろ教えてもらったことが役に立ったということになります。

もう1人が伊達政宗です。今年伊達政宗生誕450年。永禄10年(1567年)の生まれです。もうすぐ仙台市の博物館では伊達政宗の特別展が展開されますが、この伊達政宗も子どものころ、虎哉宗乙という和尚に習っています。

やはりこの虎哉宗乙がその後も政宗の軍事顧問という形になっていきます。虎哉宗乙の場合は、先ほどの今川義元の雪齋のような形で軍師とは呼ばれませんが、いってみれば政治顧問ですね。あるいは相談役というか、そういう形で一生つき合いです。

なぜそういう状況になったかといいますと、先ほど申しましたように、子どもが何人かいた場合、家督争いを防ぐためにお寺に1人を入れる、あるいは2人を入れるといったことがあった。

もう1つ、昔の言葉で「一子出家すれば九族天に生ず」。つまり、一人の子どもが出家してくれれば、九族というわけですから9つの家族が天国に行ける。

武将というのは人殺しが仕事みたいなものですから、当然昔でいう仏教の教えの殺生戒、生き物を殺しちゃいかんよというのを犯している。当然自分たちの意識の中には、没後、亡くなった後は地獄に落ちるという思いがある。それを救ってくれる言葉が「一子出家すれば九族天に生ず」。

この言葉に私が一番最初気がついたのは、京都にございます妙覚寺というお寺の文書を調べたとき、そこに斎藤道三の遺言状が残っていたんです、写しですけど。その最後の行に、一子出家すれば九族天に生ずといえり。だからおまえは出家しろと、末っ子を一人京都の妙覚寺に入れてあります。それは、今申しましたように、一人が出家してくれれば自分たちは往生極楽できるんだという当時の考え方があったことになるのではないかと

思います。

以上は、後の学校につながるような教育の場面です。

次に、当時の親から子、さらには孫への教育の実態と子育て、人づくりについてお話ししたいと思います。

武辺咄という言い方があるんですね。先ほど京都大学附属図書館で持っている「武辺咄聞書」という本があるというのは紹介しました。これはどういうことかという、先輩武将が後輩の武士たちに自分はこれこれこういう戦いをやってきてうまくいった、あるいはこれこれこういうことをやっちゃったから失敗したという体験談を家臣たちに奨励しているんです。武辺咄は奨励されてます。

その一つのおもしろい例がございます。

これは、やはり先ほど名前を出しました伊達家に伝わる話です。

伊達政宗の子ども、長男が秀宗といいます。その秀宗に、まだ元服前ですから秀宗という名前の前だっただけかと思いましたが、政宗が「武辺咄をやっているところにおまえも聞きにいけ」ということで聞きにいさせられるんです。もちろんまだ子どもですから、傳役もついて一緒に聞いている。そうすると、あるとき傳役から政宗に、幼名がちょっとわからないので、「秀宗様が武辺咄の途中で席をお立ちになります」という報告があった。それを聞いた政宗は息子を呼び寄せて、「おまえ、途中で席を立つそうだが、なぜだ」と。「厠へ行きました」と言ったら政宗が怒りましてね、「武辺咄はいばりをして聞け」と。要するにそこで垂れ小便してもいいから武辺咄は聞けということを厳しく子どもに言っています。これなんかは、伊達家中で武辺咄が奨励されていた一つの証拠だと思います。

実際いろんな武辺咄はあるんですが、しゃべるほうはしゃべりっ放し、もちろん聞くほうは聞きっ放しですので、記録にどうか文字に残らないんですね。普通は。

ところが、珍しい例がございます。これは「朝倉宗滴話記」というんですけれども、今の福井県、越前の戦国大名朝倉氏の一族に朝倉宗滴という人がいて、この人が自分の経験談を自分の家臣、子ども、孫たちによくしゃべっているんです。普通は記録、文字として残らないんですけれども、たまたま家臣の一人、名前も

わかっています、萩原八郎右衛門という人が自分の主人がしゃべっている言葉をちゃんと記録しておいてくれた。メモしておいてくれた。主人がしゃべっている目の前で筆で紙に書いたのか、あるいは話した内容を覚えていて家へ戻ってから書いたのかはわからないですけれども、いずれにしても自分の主人のしゃべり言葉そのままで文字になって残っています。

その中におもしろいフレーズがあるんですよ。巧者の大将と申は。この巧者の大将というのは名将ですね。名将といえるのは一度大事の後に合いたるを申す可候。一度大事の後というのは大敗北です。つまり、名将といえるのは大敗北を経験した人だという言い方をしているんです。

普通に考えると、人間、私なんかもそうですが、あまり失敗することなく坦々と、壁にぶち当たることもなく一生を終わればいいかなと思っているんですが、当時の武将はそうじゃないんですね。そうじゃだめだよ、どこかでやっぱり大負けをして、その負けた経験がその後の人生をつくるんだという言い方をしているんです。

これを読んだときにあっと思ったのが、徳川家康です。

元亀3年(1572年)12月21日、例の有名な三方ヶ原の戦い。今の浜松市の北西の方角に三方原という台地がございます。浜松では今「みかたばら」って発音しちゃっていますが、正しくは「みかたがはら」。そこで武田信玄が率いる2万5,000の大軍と家康がぶつかって、家康が大敗するわけです。8,000人いた家臣のうち、ちょうど1割、800人を失うんですね。負けた家康が浜松城へ逃げ戻るシーンは、多分大河ドラマでもやると思います。

夏目次郎左衛門尉吉信という侍がいて、この人は結構高齢だったので、浜松城の留守を預かっていた。三方ヶ原で家康様が負けて逃げてくる最中だという情報が入るやいなや、いても立ってもいられずに、自分の愛馬にまたがって迎えにいった途途中ですれ違う。今、すれ違ったところに、浜松の静岡大学工学部情報学部のキャンパスのちょっと手前に夏目次郎左衛門吉信旌忠碑という石碑が立っています。吉信は自分が乗っていた馬に家康を乗せて帰す。恐怖のあまり家康が脱糞したという有名なエピソードがございます。ここで

馬をおりた夏目吉信は当然そこで徒歩になり、武田軍が寄ってたかってそこで殺されてしまう。

そういう形で家康の身がわりになった侍が何人もいた。影武者という言い方をしまして、姿形が似ている人がいて本人を逃がしたという話はよくありますが、当時の史料には、残念ながら影武者というのは、私の読んだ記憶ではありません。もしかしたら30年ぐらい前の黒澤明監督の映画「影武者」のときに誰かがつくった言葉じゃないかなと思うんですが、ただ、影法師という言葉は出てきています。恐らく影法師武者、ちょっと長過ぎるので誰かが影武者と縮めちゃったのかなとも思います。

とにかく影法師武者に助けられて家康は逃げ戻ってきました。そこで有名なのが「神君御鞆像」、家康がもう本当に参ったという顔をした画像を絵師を呼んで描かせた。それを常に座右に置いて、自分が慢心しそうになったときにその絵を開いて、自分もこんな厳しいときがあったんだということで気を引き締め直したとされています。

ただ、最近の研究で、この「神君御鞆像」と言われるのは、そのとき家康が描かせたものかどうかちょっと疑問だ、もっと後のものかもしれないということで、そのあたりはこれからもう少し研究が進めば、それは違うよということになってくるかもしれません。

いずれにしても、家康は、小さいとはいえ西三河の岡崎城主の息子として生まれていますので、生まれながらの戦国大名で、それまではどちらかというと家臣たちをやや下に見ていたんですね。ところが、この800人失った、1割失っちゃった三方ヶ原の戦いの後、家康は本当に家臣を大事にします。家臣こそ我が宝みたいな言い方をしてくるのは、やはりここで一度武田信玄という戦国最強などと言われる武將に負けたことがその後の大きなバネになって、その後はあまり負ける戦いはしていません。

先ほどの朝倉宗滴が言った名将ですね、巧者の大将と申すは一度大事の後に合いたる申し可候にまさにぴったりな経験が、武辺咄という形で代々語り伝えられていく。親の経験あるいは自分の主人の経験がその下の人たちに伝えられていくというところは、やっぱり昔

の子育てであり、人づくりであると考えています。

今私はいろいろ武將たちの遺言状を集めています。遺言状というと、自分の財産を子どもたちにどう分け与えるかみたいな分配のことが書かれているイメージがありますが、当時の遺言状はそうではないです。まさに武辺咄を自分で文章にして、子どもに経験を伝えていた側面がございました。

一つの例として、北条氏綱という武將の例を挙げたいと思います。

北条氏綱といっても、神奈川県あたりの方は御承知かと思いますが、それ以外ではあまり有名ではないので少し補足しておきますと、例の戦国大名の先駆けと言われる北条早雲の息子ですから、戦国大名北条家の2代目。

今、私、「ほうじょうそううん」と発音いたしましたが、これもなかなか微妙でしてね。本人は一度も「俺は北条早雲だ」とは名乗っていないんですよ。2代目の氏綱のときから苗字を伊勢から北条にかえましたので。2代目からは北条でいいんですが、初代の北条早雲は本当は正しくない。

昨年の大河ドラマ「真田丸」、ごらんになっていた方も多いと思いますが、従来真田幸村と言われていた武將が、去年は真田信繁で放送されました。これは、去年大河ドラマの時代考証をやった若手三人組、黒田基樹さんとか丸島さんとか平山さんとかが寄り集まって、幸村というのは当時の資料には出てこないから、確かな文書に出てくる信繁で放送しようよということでNHKに談判して信繁になった。もしかしたら将来的にこの北条早雲が大河ドラマの主人公になったら、同じように北条早雲では放送できないんじゃないかなと思いますけれども、そこまで心配していく必要はまだないです。

この2代目氏綱が3代目の氏康という自分の子どもに長文の遺言状を残しています。自分はこれこれこうやってうまくやってきた、これこれこうやって失敗したという、まさに帝王学の伝授を文章にして渡しているんです。

渡した2カ月後ぐらいに亡くなっていますから、本当にこれは遺言状なんです、その中にこんなフレーズがあるんです。「その者の役に立つところを召し使い、

役に立たざるところを使わず候て、いずれをも用に立て候をよき大将と申すなり」。

その者、つまり上から見て家臣の誰がどういうところに役に立つのかということをちゃんと見なさいよ、役に立たないようなところは目をつぶっていいんだ。誰もが何かの役に立つんだから、その役に立つ部署に置くのが上に立つ者の務めだ。今風な言い方をすると、適材適所の人事配置ということになるでしょうね。苦手なところに押しつけられたら、その本人はやる気がないだろうし、いい成果も上がらないだろう。だけど、適材、つまり適した部署に置かれれば能力を発揮できるということを当時の戦国武将も見極めて、しかもそれを子どもにちゃんと教育しているわけです。

このあたりが戦国時代に5代100年北条家が続いた一つの大きな要因だと思っています。戦国時代に5代100年続くというのはなかなか至難のわざで、2代、3代で減びていった家が多い中で、北条家は5代。最後は秀吉によって征服されてしまいますけれども、それでも戦国時代に最後まで生き残った北条家というのは、やっぱりこの2代目の氏綱の教育がよかったと思っています。

その氏綱の遺言状の少し前のところで、人間にくずはいないんだということを言っているんです。私もいろんな武将たちの言葉を集めていますけれども、人間にくずは一人もないということを言ったのは、この北条氏綱一人ではないかなと思います。何かしらの役に立つんだということは、当時の武将もそういう目で周りを見ていたということになると思います。

さて、次ですけれども、子育て、人づくりということになりますと、どのように自分の子どもなりあるいは家臣なりの埋もれた才能を探し当てるか、あるいは掘り起こすかということが非常に大事だと思います。

私の経験でちょっと申しわけないですが、私は小学校のころから歴史が好きで、その歴史好きを小学校の担任の先生が認めてくれて、しかも、私の書いた作文なんかを褒めてくれたりして、将来歴史家になろうなんていう気になった側面もごさいます。要するに、才能を見出す、あるいはそれを褒めるということの大事さについて次にお話ししたいと思います。

大分前ですが、NHKの大河ドラマで「利家とまつ」という番組が放送されたことがあります。前田利家とその妻のまつ。あの年、私は時代考証はやっていませんけれども、前田利家と一番の親友と言っていい秀吉がよく、仲よく出てきました。織田信長に仕えたときがほぼ一緒、しかも年もほぼ一緒、住んでいた屋敷も隣同士ということで、親友と言っていいでしょうね。

ただ、身分的には前田利家のほうが上です。というのは、前田利家は今の名古屋市中区荒子のれっきとした武将の子どもですので、信長に仕えたころからいい待遇です。秀吉は御承知のとおり、中村区のそれこそ貧しい百姓のせがれ。秀吉のお父さんの名前、木下弥右衛門という言い方をすることがあるんですが、これは実は間違いです。私は時代考証をやっていて、秀吉のお父さん弥右衛門にはまだ苗字はなかったよということをよく言うんです。昔は苗字のある百姓と苗字がない百姓といた。秀吉は苗字がない。だから、お父さんも苗字はない。

じゃあ、木下という苗字は何という、これは、通称寧々といっています。於禰と結婚して、於禰の実家の苗字が木下だった。秀吉は於禰と結婚できたから木下という苗字を持てる階層になったということになります。秀吉、於禰との間には子どもができなかったんですけども、糟糠の妻として最後まで大事にしたというのは、そんな出発点の経緯もあったと思います。

秀吉は、現在残されている甲冑などから身長154センチです。当時の平均からもちょっと小さいと思います。当時の平均は160センチぐらいです。徳川家康が159センチ、伊達政宗が159.4センチ。なぜコンマ以下までわかるかといいますと、伊達政宗の遺骨がそのまま仙台に残ってしまって、人類学の研究者によって実測されて159.4センチ。中には180センチという大男もいますけれども、大体160センチぐらい。

前田利家は大きいんです。6尺(180センチ)です。槍の又左というあだ名がついているくらい槍が得意な前田又左衛門ですから、織田家中の約6メートルの長い槍をぶん回しながら突っ込んでいった。

一方の秀吉は体は華奢だし、背も高くないので腕力はない。二人を比べれば、前田利家のほうが早く出世

して当然。ところが、実際問題としては秀吉のほうが早く出世していくことになります。

これは信長が秀吉の埋もれた才能に気づいたからです。その埋もれた才能とは何か。これは実は話術です。話上手。秀吉のことを「人たらしの天才」と言い方をします。今はあまり人たらしという言い方はしませんけれども、話術によってその気にさせるみたいな術を持っていた。

なぜ信長が秀吉の話術の才に気がついたのか。残念ながら書かれたものはないので、これは私の推測です。秀吉が織田信長に仕えた最初は小者で、小者の仕事の一つがあ有名な草履取りです。冬の寒い朝、「出かけるぞ」と言うと、「はっ」と言って秀吉が草履をそろえた。信長が足を乗ってみると生暖かい。「これ、おまえ尻に敷いてたな」と叱ろうとすると、「いや、そうじゃありません。懷で温めていました」という有名なエピソードがあります。あれは多分嘘だと思いますけれども、とにかく草履取りはやっただろう。

そうすると、その延長線上で今度は馬のくつわ取りもやるんですね。信長が何人かの家臣と連れ立って外へ出るときには家臣たちとの会話を楽しむ。当然一人で出るときもあっただろう。一人のときには、手持ち無沙汰とか話し相手がいないので秀吉に声をかけた。そうしたら秀吉の反応がよかった。しかも話題が豊富だったので、こいつ話がうまいなと。そこまでだったら誰でも気がつくと思うんですけども、これを戦略に使うと思ったのが、やっぱり信長ですね。

尾張から木曾川を越えて美濃、そのころの斎藤家は道三の後ですので、斎藤義龍、龍興の時代で敵対しています。木曾川を越えて前田利家たちに攻め込まれますが、斎藤家もしぶとくてなかなかうまくいかない。そこで信長は秀吉を使おうと考えた。おまえは戦いに加わらなくていいから、ひそかに木曾川を渡って斎藤家の家臣たちに寝返り工作、いわゆる内応工作をしてこいという密命を与える。

秀吉はそれを見事やるんです。やり遂げる。4人ぐらい重臣が寝返ることを約束した。ころ合いよしということで、永禄10年(1567年)8月15日、一気に前田利家たちに攻め入らせて、同時に秀吉に内応を約束した

4人が反旗を翻しましたので、難攻不落と言われた岐阜城、当時の稲葉山城がたった1日で落ちる。で、信長はすぐ城を移して、稲葉山を岐阜に改める。

今年岐阜では、織田信長公岐阜命名450年、あるいは岐阜入城450年祭ということでいろんなイベントが組まれておりますが、信長にとってなかなか落とせなかった城を秀吉の話術の才によって落とせたわけですから、前田利家より早く出世させていきます。

なぜ秀吉がそんな話術の才を身につけていたか、秀吉の子どもころからの履歴を追うとある程度わかってきます。「太閤素性記」という史料の中に、秀吉が若いころ針売りをやっていたとある。針を売るのに、当時は店を構えてお客が来るのを待っているんじゃない、まさに行商、セールスマンです。話をうまく持ちかけて針を売っていく才能に長けていたところを信長は軍略に使ったということになります。

先ほどの適材適所主義と同じで、埋もれた才能は人づくりに欠かせない。譜代門閥と言われ、従来は家老の息子は家老といった流れだったのを、信長はそうじゃないと。貧しい百姓のせがれでもどンドンンドン抜擢していく。私はこれを能力本位の人材抜擢という言い方をしますが、だから信長はあれだけ急成長を遂げたと言えると思います。

さて、せっかくこの静岡へ来ていただいておりますので、次は徳川家康にまつわる話をさせていただきたいと思っています。

天下統一の覇者が信長、秀吉、家康ということで、先ほど、家康が三方ヶ原の戦いで大敗北をして、それがばねになって名将になっていったとお話ししました。

ちょうど昨日で夏の甲子園が終わりましたが、私は昔書いた本で、戦国時代というのはちょうど夏の甲子園と同じだ。戦国前半が地方予選で、地方予選を勝ち抜いた高校が甲子園で日本一を目指す、深紅の優勝旗を目指して戦うと書いたことがあったんですが、あるときふっと、これは間違いだと気がつきまして、次の再版のときにはその部分をこっそり消しました。

なぜかという、夏の甲子園だと、どこかで一度でも負けると決勝には残れませんね。最後の覇者にはなれ

ない。ところが、戦国時代はそうではない。どこかで負けても、また力を蓄えて次に勝てばいいわけです。信長も秀吉も家康も追いかけますと、何度も負けているんです。

これは史料の読み方とか史料の捉え方のポイントになると思うんですが、そこに書いてあるから全部が全部正しいというふうに読んじゃうと、結構間違いがあるんです。

例えば、織田信長の一番詳しい伝記は「信長公記」といいます。今、我々が信長の伝記を書こうと思えば、もちろん信長関係の古文書も調べますが、その「信長公記」に依拠するしかないです。ところが、その「信長公記」には信長が負けた戦いは書いてないんです。太田牛一という信長の家臣だった人が信長の伝記を書いているので、自分の主人だった信長の傷になるようなことは書きたくなかったということになりますので、いい史料だと言われていても、やっぱりいろいろ疑ってかかる必要がある一つの例だと思います。

さて、家康の伝記としては、徳川幕府が編さんした「徳川実紀」にこんな言葉が載っています。これは家康の言葉です。「ややもすれば己が好みにひかれ、わがよしと思ふ方をよしと見るものなり。人にはその長所あれば、己が心を捨て、ただ人の長所をとれ」。

要するに、自分の部下を選ぶときに自分好みの人ばかりを集めてはだめなんだ。どうしても自分と同じ考えを持っているような者を集めたくなるけれども、人にはその長所あればということは、人にはそれぞれ長所があるんだから、自分の心は捨てて、その部下の長所をとれという形で、部下の長所を見出すというところに家康は人材抜擢という点では力を入れていたということになります。

今年の大河ドラマ「おんな城主」では、今は虎松という名前前で子役がまだやっていますが、その虎松が成長して直政になる。その直政が家康に仕えて、俗にいう徳川四天王、酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、そして井伊直政の4人がいわゆるベスト4のような形で言われます。

井伊家はもともと三河譜代ではないんですね、徳川譜代ではない。御承知のとおり、今川の元家臣だった。

その井伊家の人間がなぜ家康にあれだけ抜擢されていったかという、井伊直政の単なる武功、戦いでの働きぶりではなくて、いわゆる交渉人としての長所も見ていたということになります。家康が井伊直政なんかを抜擢していく流れなんかは、誰がどういうところで役に立つのかをちゃんと見ていた証拠ではないかと思えます。

それから、家康の言葉の中で先ほど、宝の中の宝は家臣であるみたいな言い方をしていますけれども、家臣を抜擢するに当たって、一言で言うと、忠臣の子は忠臣になるという感覚とか思いが家康にはあったんです。

一つの例を挙げておきます。天正10年(1582年)、徳川家康が織田信長軍の一員として甲斐に攻め込んで、武田勝頼が天目山麓で自害をして武田家が滅びるんですが、そのとき、いわゆる武田二十四将、武田家24人の家老クラスのうちの一人に、土屋惣蔵昌恒という人がいた。

戦国大名家も、落ち目になるとどんどんみんな逃げ出しちゃうんですね。武田家、最盛期には2万5,000という大軍でしたが、信長に追われて甲斐の天目山麓の田野まで来たときには、たった50人に減っていた。その50人の中で、武田二十四将と言われた家老クラスは、今申しました土屋惣蔵昌恒という武将しかいなかった。彼は勝頼が自害するときにその介錯をし、そこで自害したという話を聞いた家康はすぐ、その土屋惣蔵には男の子がいなかったか、いたら探し出せという命令を出します。要するに、忠臣の子は忠臣になるという考えで、その子どもを自分の家臣に迎えたい。

一生懸命家臣たちが探しますが、見つからなかった。大分たってからです。駿府城になって、駿府から家康が江戸に向かっていくときに、今の国道1号線、旧東海道を通過して、現在は静岡市清水区興津清見寺という古くからのお寺の前を通りかかったときに手紙を書く用事を思い出しまして、お寺に入って行って住職に「済まんが、紙とすずりをかしてくれ」ということで手紙を書いた。書き終わってお寺を出ようとしたときに、「ところで、先ほどこの紙とすずりを持ってきた小坊主、なかなか立ち居振る舞いがしっかりしていたけれども、

誰か由緒ある人の子どもか」と聞いているんです。

実は、その子どもが土屋惣蔵昌恒の忘れ形見だったんですが、住職は、武田の元家臣の子どもを預かっているというのは家康にはまずいかなというので言葉を濁していたんですが、あまりにも家康が褒めるものですから、つい「実は土屋惣蔵昌恒の子どもです」と言ったら、家康は即座に「そいつは忠臣の種だ、わしにくれ」と言っているんです。そのまま駕籠に乗って江戸に行って、迎えに出た秀忠に、「途中で忠臣の種を拾ってきた。これを大事に育てるように」ということで渡しているんですね。その子どもが元服して、秀忠から忠という一字をもらって土屋忠直になります。

この人は、今の千葉県の久留里で2万石の大名になります。それで終わっちゃうんですが、今度はその子どもが、ですから土屋惣蔵昌恒からすると孫に当たる土屋数直という武将が何と何と老中に抜擢される。

その事実を知るまで、私も江戸時代の老中というのは三河譜代、例えば酒井だとか大久保だとか本多とかいう家からしか出ないとばかり思っていたら、意外や意外、元武田の家臣の子孫も老中に抜擢されている。これはやっぱり家康に見る目があったんですね。忠臣の子は忠臣になるという信念が生きていたのではないかと思います。

その家康の人材抜擢に関してちょっとおもしろい史料があるんです。これは「岩淵夜話」というもので、家康は自分の子どもの秀忠にはそんなにがみがみ教育していません。そのかわり、秀忠の周り、秀忠を将来支えてくれるであろう若い家臣たちに教育を施しています。秀忠本人をじかに教育するよりは、秀忠づきの、将来秀忠を支えるであろう家臣たちに教育を施しているという例があります。

これはおもしろい例ですが、もう家康が駿府の大御所になって退いて、將軍職は秀忠。その秀忠が江戸城で何人かの重臣たち、後の老中に当たる人たちを集めて、ある一つの役職にあきが出たのでその後任を誰にしようかと相談し合った。ところが、なかなか名案が浮かんでこない。そのとき、その中の一人、土井利勝が「ここはひとつ駿府の大御所様の御意見を聞いてみましょうか」ということで、土井利勝が家康のところへ

来て、「これこれこういうわけで今一つの役職にあきが出て、秀忠様は誰を後任にしようか悩んでおられます」と言ったとき、家康が一人の武将の名前を言うんです。残念ながら、誰かというのはわからないですが。そうしたら、土井利勝、正直といえば正直なんです、「今家康様が言われたその者はふだん私のところに入りにしていませんので、その人物のよしあしは私はわかりません」と答えちゃう。

家康はそのときすごい怒りまして、「今言った者はそんなに名が知られていない者じゃないぞ。おまえのところにだけ出入りするのが出世していくようになったら終わりだぞ」ということで、懇々と言い含めています。土井利勝はその後老中になって徳川幕藩体制を支えていきますので、そういう形での教育があったということも、私はさすが家康だなと思っております。

さて最後、終わりというところに入りますが、今日は戦国武将に学ぶ子育てと人づくりということで、学校がない時代、どういう形で子どもたちに教育をしていたかということ。それがどう生かされたか、あるいは人材抜擢にどうつながったかという実際例のお話を幾人かさせていただきました。

教育というのは、何も学校教育だけじゃないというのは当時の人たちの中でも意識されていて、一種の今風な言い方をすれば生涯教育です。ある程度大人になってから、例えば自分で薬学を勉強するとか、あるいは日本の歴史を勉強するとか、そういう形で自分磨きといいますか、それをやっています。また、そういう自分磨きをした人がやはり能力を発揮できたということにもつながっていったと思いますので、私は、そういった意味でも、学校教育も重要ですけども、その後の生涯教育も重要なところを最後にお話しさせていただいて、講演を終わらせていただきたいと思います。

長時間、御清聴ありがとうございました。



講演者

俳優

かけい とし お
寛 利夫 氏

聞き手

元NHKニュースキャスター **牧野 光子 さん**

「寛利夫 これがオレの生きザマだ！」

【寛】 皆さん、こんにちは。本日はようこそいらっしゃいました。関ジャニ∞の村上信五です。

【牧野】 つかみは、最高にOKという感じでしょうか。元気よく登場していただきました。改めまして、俳優の寛利夫さんです。お座りいただいて。寛さんは静岡県浜松市出身でいらっしゃいます。地元にごうやって帰っていらっしゃり、静岡の番組もいろいろと担当していらっしゃるのです。

【寛】 「サタ☆ハピ!しずおか」は1年ぐらいいました。

【牧野】 浜松東高校卒業後は、大阪芸術大学舞台芸術学科に進まれて、大学時代に劇団☆新感線に参加。卒業後には劇団第三舞台に参加。解散公演まで、殆どの作品に参加したということですね。舞台はもちろんのこと、TVドラマ、映画とか、バラエティーにもお出になり、ドキュメンタリー番組のナレーションにも。本当にマルチに活躍されています。最近では、やはり直虎。今、県全体が直虎ブームに沸いている訳ですけども、初期の頃出演されておりました。本当に井伊家のために尽くした役柄でした。

さて、長く俳優として活躍されていらっしゃると、先輩後輩でどうやってコミュニケーションをとりながら盛り上げて撮影するんですか。

【寛】 役者の場合、役の台詞での人間関係というのがあって。役の中で成立していれば、役柄で普段接する

ことはないです。

【牧野】 現場に入るときは、「どうもー」みたいな感じで行くんですか。

【寛】 行きませんよ。普通にしていますよ。

【牧野】 割と芸人さんは、神経質だったりするんですね。

【寛】 芸人さんは、真面目で静かな人が多いです。

【牧野】 今日は、高校生の子を持つ親御さんたち、PTAの皆さま方が中心にお集りいただいておりますので、寛さんの小さな頃ですとか、どういうふうにお育ちになったのか、その辺りをお聞きしたいと思うんです。今、いろんなネットの情報が上がっています。

【寛】 そうですね。本当のこともあり僕が創った話もあり、入り混じっていますよ。

【牧野】 著書の中にも色々書かれております。小さい頃、割とウァーと大きな声を出すような子で、親御さんが心配していたとか、そんなこと。

【寛】 突発的に大声を出す子どもだったんです。広い運動場みたいなところがあると真ん中まで突っ走って行って、ど真ん中で大きな声を発して、戻って来るみたいな。

【牧野】 親御さんから怒られていたんですか。

【寛】 いや全く。

【牧野】 ところで、寛さんは4人兄弟で一番上のお兄さんとは19歳も年が離れて。

【寛】 みんなおじいさんとおばあさんですよ。

【牧野】 殆ど兄弟喧嘩にならないんですか。

【寛】 兄弟喧嘩はしてないですね。

【牧野】 だから、自由奔放になってしまったのか、どうですかね。

【寛】 俺のすぐ上の2番目の兄貴が教育係で。兄貴・姉貴・兄貴・俺なので一番俺に近いけれども、俺が小学校の時に大学生だったので、ギャアギャア騒いでいると、「うるさいお前は」と持ち上げてバーンって突き落とされていました。

【牧野】 ご両親との関係はどうでしたか。

【寛】 兄弟がそうなので、俺が24歳の時に親父が70歳。

【牧野】 ご両親にすごく怒られた思い出は。

【寛】 大きいのはないですね。何か悪さをして、冬の寒空に裸で放り出されたのはあります。根本的には相当甘やかされていました。

【牧野】 お父様は、綿布の卸商。

【寛】 浴衣生地とかの間屋です。

【牧野】 浜松らしいですね。こだわりがあって、好きなものは突き詰めるというか。寛さんも、気に入った服があるとそれをとことん着尽くすというか。

【寛】 そうです。僕の基本的な生活体系は、役者をやる時に衣裳的に服を着る訳です。こういう格好かジャージか、どっちかです。今日は記念式典ですから、赤いネクタイでね。

【牧野】 格好いいですね。ネクタイ1本にもこだわることも著書の中には書いてありますね。

【寛】 衣装も映る以上は、価値の中の一つなので。刑事だから弁護士だからそれらしい服を着るっていうよりは、コーディネートして、スタイリストにやってもらって着るというのをします。自分の衣装は自分のスタイリストに、1着絞上げて作ってもらって、「監督、この1着だけでいきたいんだけどいいですか」と言って、なるべく1着で通すんです。

【牧野】 衣装代がかからなくていいですね。

【寛】 最近、制作日数も世知辛いので、着替えの時間さえもちょっと惜しいというのがあって。なるべくそうしています。

【牧野】 その辺がこだわりでしょうか。中学の部活って

何でしたか。

【寛】 バasket部をやっていました。小学校5・6年はサッカー、スポーツ少年団だったので。体が弱かったのもあり、Basket部へ行った感じですか。

【牧野】 そこでガンガン鍛えられたんですか。

【寛】 中学の時は毎日5時間とか、勉強もやっていました。小学校の時には本当に勉強をやらなくて。先生にチョークで頭をコーンとやられていたような小学生だったんです。そういう経緯があって、中学はものすごい勉強をしたんです。

【牧野】 スポーツも勉強も頑張るわということで、優秀な成績で卒業して。

【寛】 中学の時は優秀な成績であったんです。どういう訳か、国・数・英は好きでしたけれども、理科と社会が理解できなくて。この2教科だけがだめで、3教科勝負になっちゃって。

【牧野】 浜松東高校に入学されて、高校時代どうお過ごしになったのですか。

【寛】 高校もBasket部でした。高校になったら、すっかり勉強しなくなっちゃって。学校には遅刻して行くんですよ。コーチが厳しいんで、Basket部だけはちゃんと出て帰るといふ。

【牧野】 親御さんは、そういう高校生の寛さんを見てどう思っていたでしょうね。

【寛】 部活はちゃんとやっていたんで、ノータッチでした。

【牧野】 ご自分のお子さんがこうだったら、どうですか。

【寛】 高校も5教科全部万遍なくちゃんと勉強をやっておいた方がいいよね。

【牧野】 高校生という難しい年頃なので、あまりご家族と口をきかないとか。

【寛】 殆どお母さんとかお父さんとかしゃべらなかった。一番触れられたくない時期だよ。

【牧野】 女の子にも興味を持っているだろうとか思いつながりながら、その辺は。

【寛】 親は思っているでしょ。今になって考えればそうでしょうね。どんな子と付き合っているのかな、勉強ってどうなのかな。何かやっていないのかなと色々あるでしょ。

【牧野】 そういうときにも何も言わずに。ご兄弟もそう

ですか。

【寛】兄弟も、結婚して他のところに行っていますので、僕が高校ぐらいのときには同じ家には住んでいなかったです。

【牧野】高校生の頃の寛さんは。

【寛】一番大事な瞬間じゃないですか。このピリオドを話すのが。一番不適切な人間を今日呼んでしまったみたいな感じがありますよね。不毛な高校だったからね。中学は大丈夫だったけれども、女の子にもてたラッキーでよかった。高校の時は全くだめだね。

【牧野】今日は高校時代が肝心なので、浜松東高校にもご協力をいただき、ネタを収集いたしました。

校長先生、コスギ先生、会場にいらしていますけれども、ご協力いただきありがとうございます。寛さんの同級生、スズキさんにも。

【寛】いたような気がする。

【牧野】同窓会長さんから伝手をたどっていただいて、同級生のスズキさん、演劇部だった方とコンタクトがとれまして、寛さんについて聞きました。

バスケットボール部において、小柄ながら俊敏でやたら元気があって、部活動や休み時間は生き生きしていた印象です。舞台上で活躍している姿に、なるほど同じだと思ったということです。

【寛】変わってなかったんですね。

【牧野】演技でも、あの頃と同じだなというふうに思っ

ていらっしゃるということですね。

【寛】同じなんだ。

【牧野】ご自分では、もうちょっと成長しているかなと。

【寛】ちょっと違うんじゃないかなって。色々経てきているじゃないですか。昔はカメラの前でしゃべらないから。こういう公でしゃべるってこと普通じゃないでしょ。

自分の中でも、いろんな経験の紆余曲折があって現在に至っている訳です。それで同じって言われると、何だ、俺振り出しに戻っているだけみたいな、感じがするね。

【牧野】ある意味、変わってなくてよかったと思ったかもしれませんね。スズキさんは安心感があったのかも。堅実にお仕事されている感じです。その他、「保健体育」の授業は、よくスズキ先生に「寛、目を開けて寝るな」と叱られていた。

【寛】スズキ先生というのがバスケットボールの顧問ですよ。この人が怖いんです。

【牧野】昔はそういう先生がいましたからね。

【寛】高校の時なんて普通そうでしょ。学校に行ったら、弁当食うか寝ているかどっちかですから。

【牧野】そうかもしれませんね。

【寛】勉強はしないとだめだよ。俺、大学入試の赤本。あれでチェックして今日は4割当たったとか、勘を養っていた毎日。適当にAとかBとかチェックして今日の勘はよかったとか、そんなことやってたんだ。

【牧野】でも、要領よくここまで。前髪を立てた感じで、よく櫛で立てていましたね。短髪のイメージがあります。

【寛】バスケットボールだったんで。スポーツ刈りとかそういうのでなきゃいけなかった。

【牧野】バスケット部から引退してある時、「俺さ、俳優になりたいと思っている」と真剣に告白されたときには驚いた。僕は「そんなものになれる訳がない、飯食えないよ」と笑ったが、その後とても後悔しています。

【寛】スズキ君、予想が外れていた訳だね。スズキ君は演劇部だから。

【牧野】食えないと、まともに受け取っていなかったのかもしれない。

【寛】俺も、大阪芸術大学の舞台芸術科というところに入れば、職業訓練校を卒業するみたいに、そのままプロの俳優になれるんだと思っちゃっていたから。何の疑いもなかったからね。卒業してからが色々大変なのに。

【牧野】ところで、演劇部に入りたいという申し出が寛さんからあったので、「現代国語」の顧問ミヨシ先生にお伝えすると、「ふざけたやつは入部させない」と一蹴されてしまいました。今考えると、あの時寛さんが入部していれば、今演劇部は存続していたかも。

【寛】もうないんだ。

【牧野】復活させたらどうですか。でも、そういうことで入りかけた気持ちか。

【寛】中学3年生の卒業式の日、みんなの前で「俳優になります」と言ったんですね。そこから出発しているので、その気はあったんですね。高校でも演劇部に入ろうかなと思ったんだけど、体を鍛えた方がいい

んじゃないかというので、バスケット部に入ったんです。これは正解でした。

【牧野】鍛えることも、体をつくるということも、役者としては大事なことです。ミヨシ先生と数年後静岡市の呉服町通りでバッタリお会いした際に名刺をお渡ししたら、「何だ、お前芝居やめちゃったのか」と言われ、演劇に対して僕の方が不真面目だったと思ったということです。

【寛】やっぱり、何かやり残したことがあるんじゃないの。

【牧野】通常はこういうパターンですね。演劇をやりたいか思っている、そういう仕事に就くのはなかなか難しく。寛さんはそういう方々のいろんな夢を背負っている訳です。

【寛】矛盾したことを言うんだけど、食うことを考えちゃうと駄目だね。誰かに食わしてもらうぐらいのつもりでやった方がいいね。

【牧野】もしかしたら、すごい夢を持っているお子さんの親御さんもいらっしゃるかもしれません。そういう時には、「あなた、そんなこと考えてないで。夢みたいなこと言っていないで」って多分おっしゃると思うんですけど、どうですか。

【寛】そうだな。夢みたいなことだから進める。どうしたら行けるかなって、何となく道順を、間違っているって考えていけば、その道順で行けるんじゃないかなって、カーナビを設定すると行けるんじゃないか。俺は大阪芸大を卒業したら、はい出来上がりって、プロの俳優ってなると思っていたので。カーナビの設定が勝手にあったんですね。

【牧野】著書の中にも、なりたい自分をすごく鮮明にイメージするのがいいというようなことも書いていらっ

しゃいました。

【寛】こういう役者になるというのはまた難しいね。俺は有名になりたいとは思っていた。色々選択肢がある中で俳優を選んだ。勉強もしていないのに、よく大阪芸大に入れたと思うじゃないですか。

【牧野】面接なんかも勢いで。

【寛】実技で、役者なんてやったことない訳ですから、バスケットのパントマイムをやったり、高村光太郎の「道程」を覚えて読みなさいと言われて読んだり、そういう

試験だったのでラッキーな時に入りましたね。

【牧野】アイドル好きで浜松に丸井があった頃、木之内みどりさんが屋上でサイン会に来るといって、一緒に見に行ったことがありました。あの頃、西武百貨店にSBSラジオのサテライトがあって、よく芸能人が来ていたのに夢中になっていた記憶があります。

【寛】そのとおりです。西武百貨店の1階にラジオの公開ブースがあって、毎日のように歌手、芸能人が来て、みんなの前で歌っているラジオ番組があって、自分が好きな人の時は、昼の放送なので学校を早退して行くんです。

【牧野】木之内みどりさんとか、あと、どなたがお好きだったですか。

【寛】木之内みどりさん一本でした。

【牧野】憧れみたいなのがあってこういう世界に入るところもあり得るかもしれませんね。中学で役者を目指したっておっしゃっていましたが、その頃、好きな作品とか憧れの役者さんとか、こういう人になりたいというのはあったんですか。

【寛】三浦友和さんは好きでしたね。当時「赤いシリーズ」とか、山口百恵さんが流行っていたので。映画で「伊豆の踊子」をやっていて、よく観に行きました。俳優としての基礎も何もない頃なので、単にいいなと思っていただけですよ。エキストラのアルバイトで、2度ほど学校を休んで京都とか名古屋に行きました。

【牧野】そこから役者の道へということですか。当時、営業科営業コースは女子がいない分、いろいろ本音が話せたじゃないですか。

【寛】営業科という科は、要するに商品を売るような実技練習みたいなのがあって。学校の中にコンビニみたいなスペースがあって、そこでお客さんと店員になって売り買いのシミュレーションをするという授業とかあったんですよ。それをビデオカメラで撮って、後で見て検証するというのがあるって、だから演技ですよ。そこで俺、初めて演技しているんですよ。

【牧野】コツコツ簿記の勉強だとか、それこそ寛さんの時代は算盤というような勉強も聞いていました。

【寛】簿記検定、情報処理検定。検定がいっぱいありましたね。商業高校ですから、秘書科があるんです。

【牧野】 その当時って、好きな女の子とか彼女とかがどうだったですか。

【笥】 彼女はいなかったけれども、好きな子はいましたね。スタイルのいい、かわいい女の子がいましたね。

【笥】 告白もしてなくて、卒業して大学に入ってから、その子の家に好きだったという手紙を出したんです。そしたら、しっかりしたお断わりの返事が来ました。

【牧野】 ちょっと時間を置いて失恋という。

【笥】 僕が19歳の時に来た返事ですよ。そういう手紙って、ずっと箱に入れてとってあるじゃないですか。一昨年ぐらいに家にあるこの手紙を俺のところに送って来ちゃって。50代になって当時の手紙を見て全部記憶が蘇って来ちゃって。まずいと思って、全部神社に持って行って焼いてもらいました。大学の時、付き合っていた彼女からももらった手紙も明治神宮に持って行ってお焚き上げしてもらいました。

【牧野】 もったいなかったですね。

【笥】 ああいうのって、書けないですから。19歳のときの文章は、19歳じゃないと書けないので。

【牧野】 もう一回読んでほしかったです。スズキさんからいろいろメッセージがありました。とにかくテレビや舞台のまんま昔から元気で、みんなから愛されていたと思います。元気をいつもありがとうと言いたいです。本当は真面目で何事も一生懸命なのに、シャイで照れ隠しをするところが不真面目と誤解されていましたね。笥さんと同じ学校生活を送れたことを誇りに思います。励みになっています。笥さんも55歳になるけれども、これからも一生懸命な元気をお願いします。ご活躍、心から祈念いたしますということで。こうやって同級生が応援してくれているのは、本当に心強いですね。

【笥】 ありがたいです。

【牧野】 奥様ってどういうタイプですか。

【笥】 さっぱりしていますね。身長168cm、足長めのモデル体型だけれども、普通の人です。

【牧野】 アンジェリーナ ジョリーに似ているって、笥さんがおっしゃったんですか。

【笥】 結婚発表のときね。当時、奥さんの似顔絵を描くというのが流行っていて、マジックで描いて出したんです。

【牧野】 168cm があると本当にスレンダーな。ほぼ一目惚れだって聞いていますよ。

【笥】 そうですね。知り合いの劇団の受付をやっている。ちょっと声をかけて。

【牧野】 42歳でご結婚なさったということで。ちょっと遅目だったということですけども、今でも仲よく。

【笥】 かなり仲いいですよ。真面目な話。友達とかお姉さんみたいな感じになってくれるといいよね。

【牧野】 今、友達親子みたいな、そういう方も結構いらして。2人でお買い物に行くとか。恥ずかしがらずに男の子でも一緒に買い物に行くとか。

お時間になってきました。今日は魅力をいっぱいお話しいただいて、笥さんってこういう方なんだと思って。これからテレビで拝見するときは、小さい頃からやんちゃだったのかなとか、いろいろと思いながら拝見させていただきます。

皆さんに、長い目で自分のお子さんを見てほしいというような感じでしょうか。メッセージを最後をお願いします。

【笥】 皆さん、今高校生の息子さん、娘さんをお持ちのお父さん、お母さんがいらっしゃるって、色々心配することがあると思いますが、人間、何も考えないで生きている人は年齢関係なくおりません。みんな何かを考え、悩み生きています。ある時は声をかけ、ある時はそっとしておき、決してラインを盗み見することがないように。そういう秘密を盗み見すると、親に対する信用がなくなってしまいます。スマホの盗み見だけは絶対しないようによろしくお願いします。今日はどうもありがとうございます。

【牧野】 ありがとうございます。俳優の笥利夫さんでした。本当に楽しいお話をありがとうございました。今一度大きな拍手をお願いいたします。